経済情報コンダクター

月刊 東海財界

TOKAI ZAIKAI

東海学園大学・石川清新学長
「ともいきSDGsを教育理念に」

東海学園大学長
石川 清氏

Monthly Report

日本弁理士会東海会会長 村瀬 裕昭

デジタル時代こそ知的財産守る活動が重要
「農林水産知財の啓蒙活動もスタート」

西濃運輸取締役社長 小寺 康久

山積する課題に自社の強みを生かし物流の枠を超えた総合窓口をめざす

SPC代表取締役 佐藤 広大

ハイクラス人材紹介が名古屋進出
東海地方の事業承継問題をメーンに

ひまわり福祉会理事長・林照美さん
「利用者もスタッフも生き生きと」

「自らを誇りに思える服を」
「KYODAI」の口コに思いを込めて

映画「認知症と生きる 希望の処方箋」公開
僧行会城西病院の音楽療法士にスポット

創立135周年迎える「東海高校」
人々の羅針盤となる人材育成

「物価偽装」の事実もうやむや
大阪高裁が不当な逆転判決

名古屋の「新聞報」70周年記念号発行

メディア業界誌史上初　フルカラー１６ページ

2023
6月号
（毎月２５日発行）

東海学園大学の新学長に医学博士の石川清さん

「ともいきＳＤＧｓを教育理念に」

東海学園大学（本部・愛知県みよし市）の新学長に石川清氏が就任した。石川氏は名古屋第二赤十字病院院長から愛知医療学院短期大学学長に転じ、４０年以上医療界で活躍した後、教育界を５年経験しての学長就任となる。「医療と教育は組織運営面で共通点もある。経験を生かして教職員とともに学生のやりがい、学びがいを実現していきたい」と話す。地域貢献を含めて大学の課題解決にどう取り組むのか、抱負などを聞いた。（聞き手は本誌編集長　塚本隆）

――４月１日に着任されました。抱負を。

石川学長　私はずっと医療界でやってきて、教育界とは随分違う分野と認識していますが、組織として考えると、例えば、病院では患者さんに医療を提供、大学は学生に教育を提供し、いずれも専門性が重視されるなど共通点もあります。組織マネジメントでお役に立てるかなと、学長職を引き受けましたが、大学の話を聞かせていただき、本学の特色としての「共生（ともいき）」という教育理念に沿ったビジョン、「ともいきSDGs」という現代にマッチした取り組みをしていることに私自身非常に関心があり、こういう取り組みに関わることは私自身もやりがいにもつながると考えました。ただ、教職員とは新たな出会いであり、これから大学の課題などの話を聞きながら、責任を果たしていきたいと考えています。

――教職員に伝えた学長の思いは。

石川　就任あいさつでは教職員を知ってからビジョンを話しますと伝えました。トップが変わったばかりでいきなり、ビジョンではないと思いました。まずは教職員ファーストであり、気楽に学長室に来てほしいとか、各部署のリーダーは部下のやりがいを見出すようなリーダーシップを発揮してほしい、そしてチームワークやアカウンタビリティー、つまり主体性の高い組織にすることが一番大事などと、これまでの経験でいいと思ったことを話しました。組織について考えは持っていますが、私のビジョンを打ち出すのはもう少し後になるでしょうね。

――大学の歴史、発展の経緯を。

石川　学園の創立は１８８８年で、その後全国的に知名度の高い東海中学、東海高校が開校、今年で創立１３５年になります。東海学園大学は１９９５年に開学しましたが、明治時代から続く歴史のある学園組織の中にある大学です。経営学部経営学科でスタートし、その後、教育内容を充実、改組して人文、心理、教育、スポーツ健康科、健康栄養、経営学研究科の６学部６学科１研究科へ発展してきました。学生は現在、１学年約１０００人、計約４０００人に上ります。

東海中学、東海高校、東海学園高校、東海学園大学の４つが１つの学校法人であることをもっと広めて、一緒に発展していくことがこれからの学校運営で大事なことだと思っています。

――建学の精神は勤倹誠実、「共生（ともいき）」ですね。

石川　「共生」という言葉は仏教学者で学園の基礎を築いた椎尾辨匡（しいおべんきょう）先生が表わしたものですが、意味するところは、実は今の時代に大変マッチした精神だと思います。先が分からない、人のつながりが希薄になっているなど、そういう課題を解決するような教育精神だと思いますね。「共生」とは、周囲の人々や社会、自然環境に生かされていることに感謝し、精いっぱい生きることで、学園共通の精神

「勤倹誠実」のもと、社会で生きていくための人間力を養うというのが教育目標です。また、２０２０年から本学が取り組んでいる「ともいきSDGs」は教養教育の柱の一つとして主に環境、国際に焦点を当てています。国連の持続可能な開発目標、SDGsへの理解を深めて行動できる力を身に付けることは学生に必要で、教員にとっても研究テーマになり、キャリアアップにつながると思っています。

――学生支援、就職の現状は。教員になる学生も多いですね。

石川　本学にはキャリアサポートプログラムがあり、就職支援も充実しています。公務員、教員はじめ企業への就職も含めて実践的なスキルアップを目指せるよう支援しています。２０２３年３月の就職率は９８．２％で、卒業生の１割が公立学校教員に合格しています。教養教育で自身のやりがいを見出してもらえれば、それを支援につなげていくことができます。このプログラムはかなりうまく機能していると思います。

――学生のサークル、キャンパスライフの現状は。

石川　サークルも基本的には学生が主体で、スポーツ、文化など活動は活発です。スポーツでは８つのクラブを強化指定にして監督、コーチをつけて頑張る学生を支援しています。男子サッカーは東海地区では常に上位に入り、全国大会にも連続出場、女子ソフトボールも昨年は西日本大会では優勝、インカレではベスト８に入賞しています。テニスも東海地区では強豪で、愛知県テニス協会会長の私としてはとても嬉しいことですね。

――大学の地域貢献、学生の留学についてどう考えていますか。

石川　地域社会との連携は大事ですね。キャンパスのあるみよし市の市長に挨拶に行きましたが、東海学園大学は市内唯一の大学で、市の期待も大きいと感じました。地域と密着した関係を築き、市の要望も聞いて相互の信頼関係を

石川　清（いしかわ　きよし）
１９４７年、名古屋市生まれ。７０年名古屋大学工学部航空科卒、７７年名古屋大学医学部卒。７８年名古屋市立大学医学部麻酔科助手、８６年カナダトロント大学留学、８９年同大学病院集中治療部助教授。２００１年名古屋第二赤十字病院副院長、０７年同病院院長。１９年愛知医療学院短期大学学長。２３年４月から現職。１７年から愛知県テニス協会会長・東海テニス協会会長。

築いていきたい。地元の企業とのつながりも大事にし、インターンシップも実現できれば、と考えています。私自身の企業人脈も活用して研究、教育との連携も模索したいですね。地域の課題解決として本学に求められているのは健康寿命、高齢者の運動プログラムや教育現場の部活動支援などがあり、学生の活動参加はすでに広がっています。海外留学もカナダ、オーストラリアなどとの語学研修プログラムがあり、奨学金制度も設けています。

――健康への貢献は医療にも通じます。学長もスポーツの趣味がありますか。

石川　若いころからラグビーをやっていましたが、４０代からは硬式テニスに変更しました。一時は試合に出ることを目標にしていましたが、体力的に難しくなり、最近は健康のため、毎朝、楽しくテニスをしています。

――ありがとうございました。